

全共出場へ大農高生を支援

16団体のチーム発足



国内最大の和牛品評会・全和牛能力共進会（全共）への大曲農業高校畜産部の出場

を後押しするプロジェクトチームが28日、発足した。県や市町、J Aなど県内16の団体で構成し、発足会議が同日、大仙市の同校で開かれた。

全共は5年に1回開かれており、今回は2027年の北海道大会。プロジェクトチームは全共への挑戦支援を通じて畜産の担い手拡大を図る。

大曲農業高校畜産部の全共出場を後押しするプロジェクトチームの発足会議

同校畜産部は、9月に由利本荘市で開かれる県畜産共進会を牛を審査する競技会に参加。11月には、全共に向けて飼育する繁殖用の雌牛の競りをあきた総合家畜市場（同市）で見学。その後も地元で開かれる共進会に出品して経験を積み、26年1〜7月の間に生まれた子牛を育成して北海道大会に臨む。畜産試験場の職員や地元生産者が調教の仕方やブラッシングの方法など飼育方法をアドバイスする。

会議にはメンバーら20人が出席。出席者からは「生徒のモチベーションをどのように保つのか」との質問が出た。県畜産振興課の担当者は、現在畜産部に所属する生徒が4年後の全共には出場できないことを挙げ、「（現在の部員には）地元の共進会への出品を目標として取り組みを継続してもらい、和牛への理解を深めて担い手の拡大につなげたい」と説明した。

プロジェクトチーム代表に就任したJ A秋田おほく畜産部会の高橋博志副部長（45）は「全共までの4年間はあつという間だ。チームのメンバーが今まで経験してきたことを出し合って高校生を送り出したい」と話した。

会議に先立ち、メンバーらが同校の大嶋農場にある牛舎を視察。「風通しが良くついで環境だ」などの声が上がった。

（神谷紗耶加）